城西考古

太石龍
城西大学
経営学部
マネジメント創造
学術館

JOSAI UNIVERSITY
城西大学水田美術館
MIZUTA MUSEUM OF ART, JOSAI UNIVERSITY

目次

ごあいさつ	・・・	2
城西大学坂戸キャンパスの近隣遺跡	・・・	3
貞末堯司先生　略年表	・・・	5
堀合公威先生　略年表	・・・	5
城西大学考古学研究会の活動	・・・	6
城西大学考古学研究会の発掘調査歴	・・・	7
吹上古墳	・・・	9
下川原遺跡	・・・	12
中小坂遺跡	・・・	15
新しき村遺跡	・・・	18
上台山遺跡	・・・	20
現在の『城西考古』	・・・	26
謝辞	・・・	28

表紙写真　　仲小坂遺跡発掘調査風景(1969年)

ごあいさつ

貞末堯司先生が亡くなられたとの報に接したのは、2021年2月のことでした。貞末先生は、東京大学文学部考古学研究室のご出身で、城西大学が開校した1965年から経済学部の講師(当初は英語)を務められ、夏休みに学生達を連れて大学近隣の遺跡を発掘されました。これが城西大学創立を初年度として行われた「入間地区学術調査五か年計画」の始まりであり、城西大学の地域貢献活動の嚆矢でした。これ以後、城西大学の最初の部活動の一つである考古学研究会を中心に、発掘調査が続けられました。また東京大学、早稲田大学はじめ、多くの他大学の学生、研究者が一連の発掘調査に参加しており、城西大学の歴史上、最初期の大学間連携活動でもあったということが出来るでしょう。

貞末先生は、この学術調査の陣頭指揮を取られると共に、考古学研究会の初代顧問を務められました。5か年計画の終了後も、考古学研究会の学生たちと共に近隣遺跡の発掘調査を続けておられ、大学に多くの考古資料を残されました。また近隣市町村の依頼を受けて発掘調査を指揮されることもあり、アカデミックな地域貢献活動を継続しておられました。

そしてご専門の中南米考古学も並行して進められ、城西大学の学生を同行した海外調査も実施しておられます。本学にはエクアドルの希少な考古資料が残されています。また城西大学の紀要に、中南米考古学の先駆的な概説論文を多数寄稿しておられました。

貞末先生は1980年に金沢大学文学部に移られ、中南米考古学を深められると共に、金沢城跡の発掘調査に参加される等、地域の史跡への関わりを継続されます。また定年退職後に城西国際大学にて教鞭をとられました。考古学研究会はOBでもある堀合公威先生が顧問となられ、20年以上続けられることとなります。貞末先生、堀合先生とも既に故人となられましたが、地域貢献、大学連携、国際的活動といった、現在改めて大学に求められている活動を先駆的に実践してこられたご業績は、今改めて振り返るべき本学の原点であると言えるでしょう。

本展示会は、特に城西大学の最初期の一大事業であった「入間地区学術調査五か年計画」に焦点を当てた構成となっています。この計画によって、本学の周辺に先史古代からの人間活動が豊富に存在したことが実証されました。本展示会の第一の意義は、城西大学が積み上げてきた考古学的学術成果を示すことにありますが、あわせて城西大学の歴史の展示であり、城西大学が建つ土地の歴史の展示でもあります。本学在学生にとっては、自分たちが学ぶ場を深く知ることが出来るものとなるでしょう。

また現在の城西大学にも、複数の考古学者が教員として在籍しております。その活動も併せて紹介し、形を変えつつ続けられている「城西考古」の学史もまた概観いただければ幸いです。

石井龍太（城西大学経営学部准教授）

図1　1975年メキシコ調査での貞末堯司先生(左から3番目)と堀合公威先生(左から2番目)
※堀合澄子様ご提供写真

城西大学坂戸キャンパスの近隣遺跡

城西大学の周辺地域には数多くの遺跡が確認されている。台地上に立地し、水源となる高麗川が流れる環境は、先史古代から人間活動に適していたのであろう。

現在確認される遺跡の多くは、縄文時代中期と古代以降に分類できる。

参考資料
埼玉県『埼玉県埋蔵文化財情報公開ページ（埼玉県全域地図）』
http://extra.pref.saitama.lg.jp/isekimap/saitama_zeniki.html（最終閲覧日2021年2月17日）

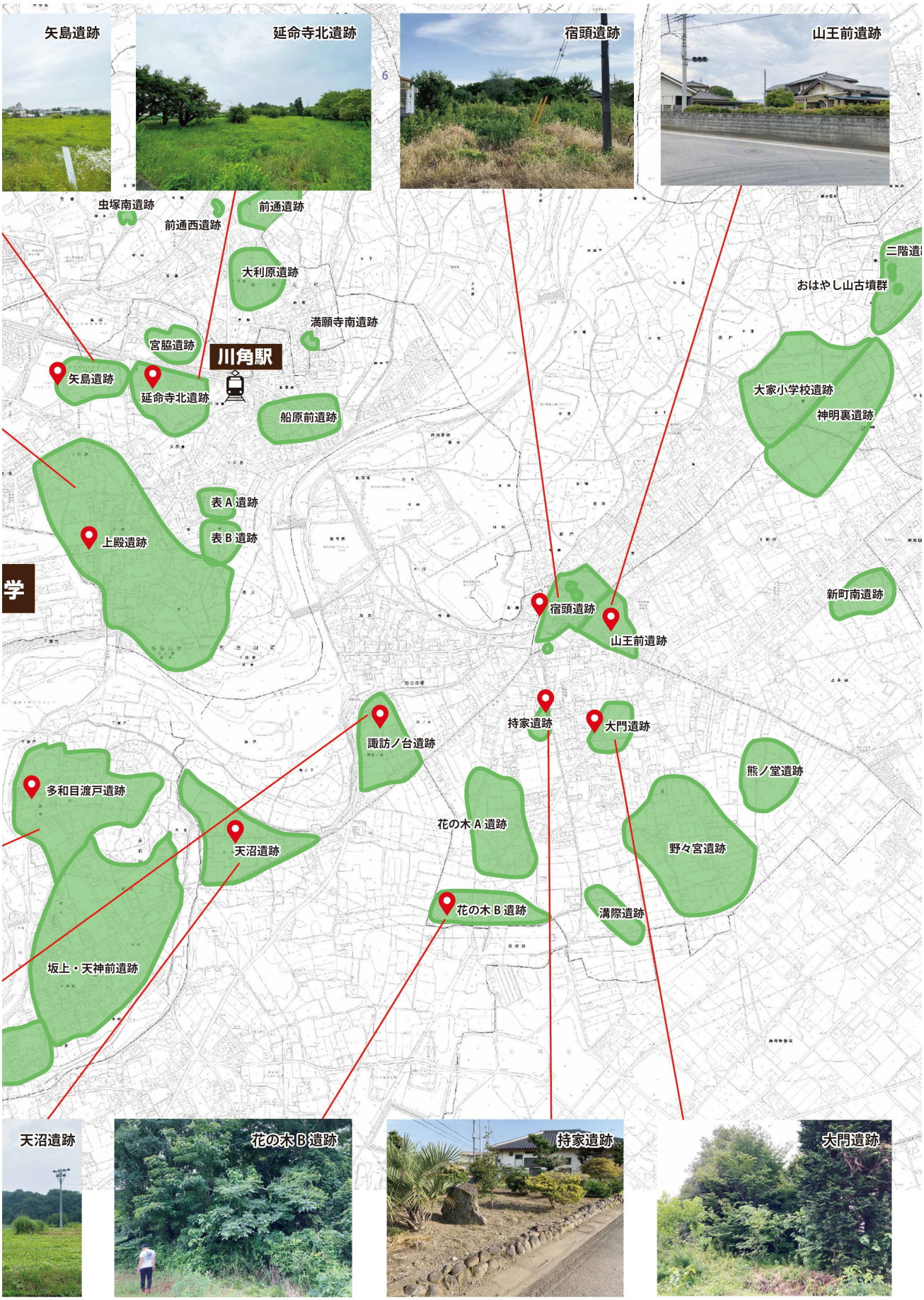


図2　城西大学坂戸キャンパスの近隣遺跡

さだすえ　たかじ

貞末堯司先生　略年表

図3　上台山遺跡での
貞末堯司先生（1968年）

1928年　生

1951年　旧制　中央大学法学部法律学科 入学

1953年　東京大学文学部考古学科 学士入学

1955年　東京大学大学院人文科学研究科 進学

1958年　東京大学文学部助手 就任

1965年　城西大学経済学部教養課程専任講師 就任

1965年　城西大学考古学研究会部長 就任（70年からは顧問）

1973年　城西大学教授 就任　学生部長などを歴任

1980年　金沢大学文学部教授 就任　金沢大学評議員、金沢大学資料館長などを歴任

1992年　城西国際大学教授 就任

1994年　早稲田大学大学院文学研究科客員教授 就任

1996年　城西国際大学大学院人文科学研究科修士、博士課程教授 就任

2021年　没

図4　メキシコ調査での
堀合公威先生（1975年）
※堀合澄子氏ご提供写真

ほりあい　こうい

堀合公威先生　略年表

1945年　生

1966年　城西大学理学部化学科 入学

1967年　城西大学考古学研究会 主将　就任

1970年　城西大学理学部化学科 卒業

1970年　城西大学理学部 助手　就任

1980年　城西大学考古学研究会 顧問　就任

1990年　城西大学理学部 講師　就任

2000年　城西大学理学部化学科 准教授　就任

2018年　没

城西大学考古学研究会の活動

今回展示した「入間地区学術調査五か年計画」をはじめ、城西大学が行った発掘調査の中心であり続けたのが、城西大学考古学研究会である。第一期生が設立した体育会系13、文化系4団体の一つであり、清水公一氏(のち城西大学経営学部教授)が設立者となり、3名の部員からスタート、初代部長は貞末堯司経済学部講師(当時。のち顧問)が務めた。現在、城西大学に残されている考古資料の大半は、1960、70年代に発掘されたものである。

1980年に貞末堯司教授が金沢大学へ移った後、理学部の堀合公威助手(当時)が顧問となった。発掘された成果報告が出版され公表される様になるのはこれ以降であり、「入間地区学術調査五か年計画」にて発掘された5遺跡のうち、『吹上』『下川原』『中小坂』が刊行されている。また楊井遺跡の玄室内模型製作(1973年)、メキシコ調査(1975年)、遺跡探訪記の発行や土器づくり等の実験考古学の実践、HPの開設(1997年)等の活動が2003年まで続けられていた。

学園祭では、発掘品の展示解説、会員の研究発表が行われた他、竪穴住居の復元(1968、70年高麗祭他)、模擬店での埴輪模型の販売(1968、70年高麗祭)等も実施された。

1983年には「実験考古学」をテーマに、春の文連祭で火起こし体験、秋の高麗祭では9号館裏側の崖で採取した土で土器を作り、高麗川の河川敷で焼成して展示し、その一連の流れを撮影した8mmビデオの上映会を実施、さらに大学のメインストリート脇に縄文時代の竪穴式住居も再現する試みが行われ、文連祭大賞、学長賞、高麗祭大賞の三冠王を達成している。第18回高麗祭(1985年)でも高麗祭大賞を受賞している。

そして研究会の機関誌として『考古学の歩み』が、70年からは『礎』が刊行された他、文化部連合会発行の『城西文化』(1983, 85年)や『研究発表誌』(1987年)にも活動研究内容を寄稿している。また90年代初頭には他サークルとの合同野球チーム「ビースツ」が活動している。

参考文献
城西大学文化部連合会　1968-87, 92-2003年『文連会誌』1-30
城西大学文化部連合会　1983年『城西文化』
高麗祭実行委員会　1968-2003年『高麗祭パンフレット』1-36

図5　城西大学考古学研究会による
愛宕塚の発掘調査(1966年7月)

城西大学考古学研究会の発掘調査歴

1965年　8月　苦林古墳遺跡(毛呂山町)
1966年　7月　下川原遺跡(毛呂山町)
1966年　7月　愛宕塚/富士見塚(坂戸市)
1967年　7月　新しき村遺跡(毛呂山町)
1968年　7月　上台山遺跡(越生町)
1968年　11月　上台山遺跡(越生町)
1969年　7月　中小坂遺跡(坂戸市)
1970年　8月　旭台(毛呂山町)※遺構・遺物出土せず
1971年　2月　多和目遺跡(坂戸市)
1971年　2月　愛宕久保遺跡(日高市)
1971年　2月　田波目遺跡(日高市)
1971年　7月　田波目遺跡(日高市)
1972年　2月　南平沢遺跡(日高市)
1972年　8月　楊井遺跡(熊谷市)
1974年　7月　栗坪遺跡(日高市)
1976年　7月　新堀遺跡(日高市)

※この他、太田金井口窯業祉(太田市1966年3月)、南原遺跡(越生町1968年4月)、
堀込遺跡(越生町1969年4月)の調査にも参加歴あり。

図6　城西大学考古学研究室の調査遺跡

図7　城西大学考古学研究会による
竪穴住居復元の様子

吹上

埼玉県入間郡毛呂山町川角に所在する古墳である。西北約200mに流れる越辺(おっぺ)川の右岸段丘上に築かれており、調査時には地名を取って「吹上古墳」と命名されたが、現在は川角古墳内の一基という理解から「川角6号墳」と呼称されている。越辺川右岸の台地には円墳を中心とした古墳群が存在し、６世紀後半から７世紀初頭を中心に築かれた大類(おおるい)古墳群(42基)と、７世紀初頭から中葉を中心に築造された川角古墳群(38基)に分類されている。

発掘調査は、城西大学創立を初年度として行われた「入間地区学術調査五か年計画」の一環として、その初年次に当たる1965年の8月10日から8月24日まで、毛呂山町と遺跡地の地主であった清水隆治氏の協力を得て実施された。また発掘調査は城西大学考古学研究会を中心に行われたが、開学当初の学術調査であったため学内外に多くの協力を仰いでおり、早稲田大学、上智大学、駒澤大学、東洋大学の学生が参加し、また東京大学の斎藤忠教授、東京教育大学の杉勇教授が参加している(肩書はいずれも当時)。報告書作成には、金沢大学文学部史学科講座の学生、院生が参加している。報告書の表紙題字は刊行当時の理事長・水田清子氏によるものである。

一帯は調査時も現在も雑木林になっており、伐採して墳丘を検出したところ、墳頂部には盗掘穴跡と推察される大きな凹みがあり、また南西部には現代の農業用貯蔵穴が掘られていた。調査は西側半分を重点的に行われた。全体に見られる葺石は河原石を用いており、越辺川との結びつきを表すと考えられている。ただし大型の平石を用いた玄室の天井石は他所からの持ち込みであろうと推察されている。

内部には長楕円形の横穴式の玄室が残され、須恵器の壺と土師器の杯(鬼高式)が並んで出土し、6世紀中葉から7世紀初頭の年代が与えられた。また鉄鏃、首飾、刀子、耳環等が出土しており、耳環が3点出土していること、遺物のまとまりが見られることから、複数の被葬者が推察されている。なお墳丘上から磁器と古銭が出土しており、後代の古墳祭礼の可能性が指摘されている。

参考文献

城西大学学術調査室編　1987年『吹上　＝吹上古墳発掘調査報告＝　城西大学入間地区学術調査報告　第１輯』

毛呂山町教育委員会　2016年『毛呂山町町内遺跡発掘調査報告書(8)』

毛呂山町『大類古墳群・川角古墳群』
http://www.town.moroyama.saitama.jp/www/contents/1287035258152/index.html(最終閲覧日2021年2月18日)

※題字は水田清子筆(報告書より引用)

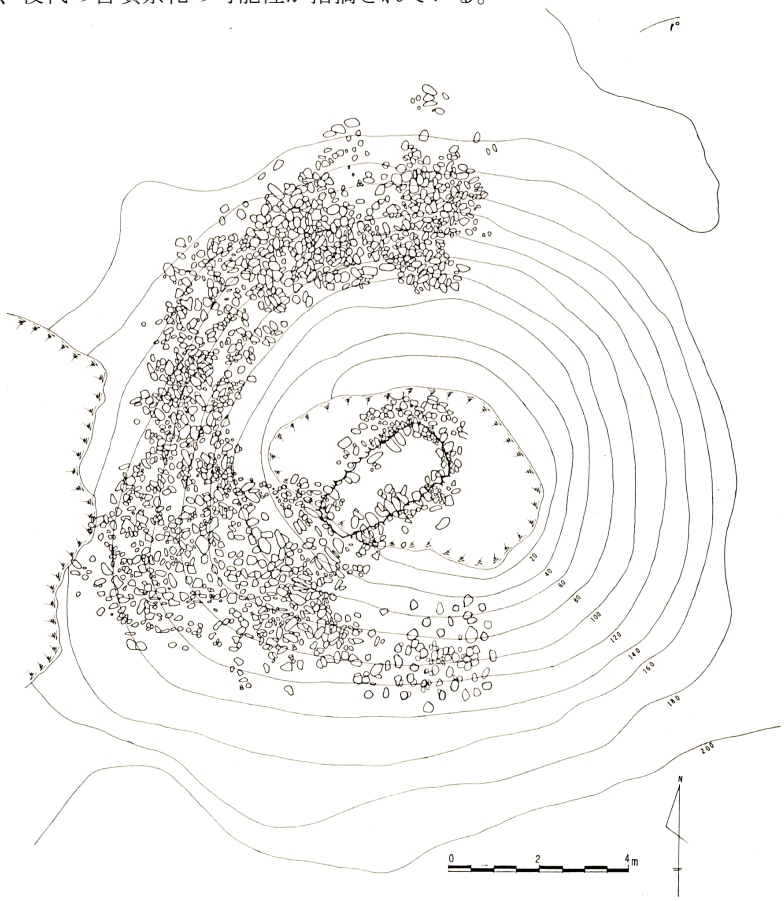
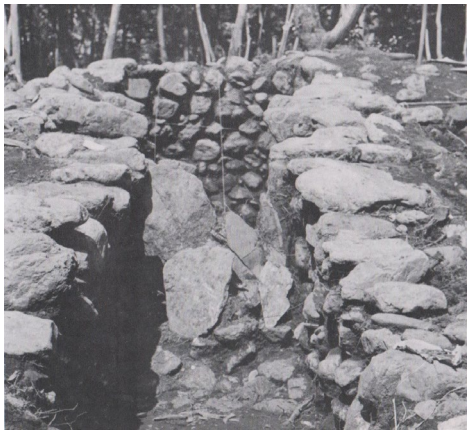


図8-1　吹上古墳葺石発掘及び墳形図
(城西大学学術調査室編1987:20)

1



2

3

図8-2　吹上古墳の遺構
1. 発掘前古墳全景(城西大学学術調査室編1987:73)
2. 羨道部より見た羨門、玄室(城西大学学術調査室編1987:79)
3. 頸飾り及び耳環出土状況(城西大学学術調査室編1987:81)

図8-3　吹上古墳の出土遺物

思わず泣いた豪雨の日

清水公一『城西考古の歩み 第１部 草創期 １９６５～１９６７』:9-１０頁

八月二十一日、長山が城の主になってから鉄鏃、須恵、土師などをぞくぞくと掘り出した。こんなに出るのではもう城を明け渡す訳にはゆかない。そこで私も石室の中へ入る事にした。私が石室の入口付近を掘っていると、長山は奥壁付近を掘り、装身具用の丸い石の玉や勾玉をぞくぞくと掘り出す。その度毎に関係者を元気づけた。彼は入城した二十日以来、名実共にそこの主となった。

お昼前は非常によく晴れていたが、室田信一君、仲晃平君、高橋智哉君の三人組が来てから雲ゆきがおかしくなり、遂に豪雨となってしまった。雨台風が来たのだ。

「先生！！引き揚げましょう！！」

「いや、やるんだ！！おいっそこの三人！！と、高橋テントを張るんだ！！－石室に水を入れるな！！」

「先生、それは無っ・・・」―三人組―

「おまえらはいったい発掘を何んと心得る！！いやなら帰れー！！」「清水！！ろうそくと懐中電灯を買ってきてくれ。」

と雨の中をてきぱきと指示をした。先生は指示だけする人ではない。自らずぶ濡れになって作業の主役を演じた。普段は非常にやさしいが、これはという時は一歩も引かないど根性。私は真の男を今日目の前に見た。あの時、途中で引き揚げていれば石の玉は地中に流れ散り、あれほどの数は発見できなかったであろう。

私がろうそくを買いに行っている間に石室上にテントが被せられていた。そのうちに高橋義男君が木に登りテントの縄を縛り付け、石室の上にテントが張られた。後の三人組はぐすぐすしていて、高橋君が一人でやったようなものだったと聞く。彼らはパンツまでびしょびしょに濡れ、焚き火をして乾かしていた。長山と私はテントの下の夜のような石室にろうそくを立てて石の玉を掘り出し、三人組は濡れ序でに石油カンに入れた水で、玉を篩いに掛けて見つけ出した。室田君は焚き木取りと水汲みをした。

1

2

3

4

図8-4　吹上古墳(川角6号墳)の発掘調査風景
1～3. 1965年8月の調査風景(清水公一氏所蔵写真)
4. 2021年7月の清掃作業

下川原

埼玉県入間郡毛呂山町南東部の下川原台地に所在している。高麗川の河岸段丘に当たる。

発掘調査は、城西大学創立を初年度として行われた「入間地区学術調査五か年計画」の一環として、その第2年次に当たる1966年の7月24日から8月20日まで、遺跡地の地主であった関根太郎氏の協力を得て実施された。発掘調査は城西大学考古学研究会を中心に、東京大学、早稲田大学、山梨大学、東洋大学、武蔵野美術学校、駒澤大学などの多数の学生が参加した他、報告書の刊行時には金沢大学文学部からも協力があった。報告書の表紙題字は刊行当時の理事長・水田清子氏によるものである。

調査時点では一帯は野菜畑と桑畑になっており、その中の休耕地2地点(毛呂山町下川原一番地)で発掘が行われた。発掘調査では、縄文時代、古墳時代、古代の遺構、遺物が検出された。縄文時代中期の平面円形の竪穴住居跡1基(勝坂式土器、阿玉台式土器、多数の石器が出土)、かまどを伴う古墳時代の平面方形の竪穴住居跡（土師器が出土）、古代(出土遺物から8世紀初頭以降)の平面方形の竪穴住居跡1基(須恵器の杯が集中出土)が検出された。なお特筆すべき遺物として、縄文時代後期初頭の注口土器(堀之内式土器)がほぼ完形の状態で出土している。また底部に墨書を持つ須恵器と陶器が古代の竪穴住居跡から出土している。周辺環境との関係も考察されており、報告書では遺跡の裾部付近まで続く河原石礫層を高麗川のかつての水路の跡であろうと推察し、出土した石錘(網の重り)と関連させて高麗川水流との関係で築かれた遺跡であろうと記述されている。

極めて狭い範囲の調査にもかかわらず4基もの竪居跡が検出されたことから、報告書では調査面積を広げれば数多くの遺跡が発見されたであろうという予見が述べられている。果たしてこの予見通り、現在では調査地点より北側一帯を含めた広範囲をまとめて一つの遺跡「上殿遺跡」と解釈されており、毛呂山町教育委員会によって6次までの調査が行われている。その結果、縄文時代中期と古代には、一帯に集落が存在したことが確認されている。

参考文献

城西大学学術調査室編　1991年『下川原　＝下川原遺跡発掘調査報告＝　城西大学入間地区学術調査報告　第二輯』

※題字は水田清子筆(報告書より引用)

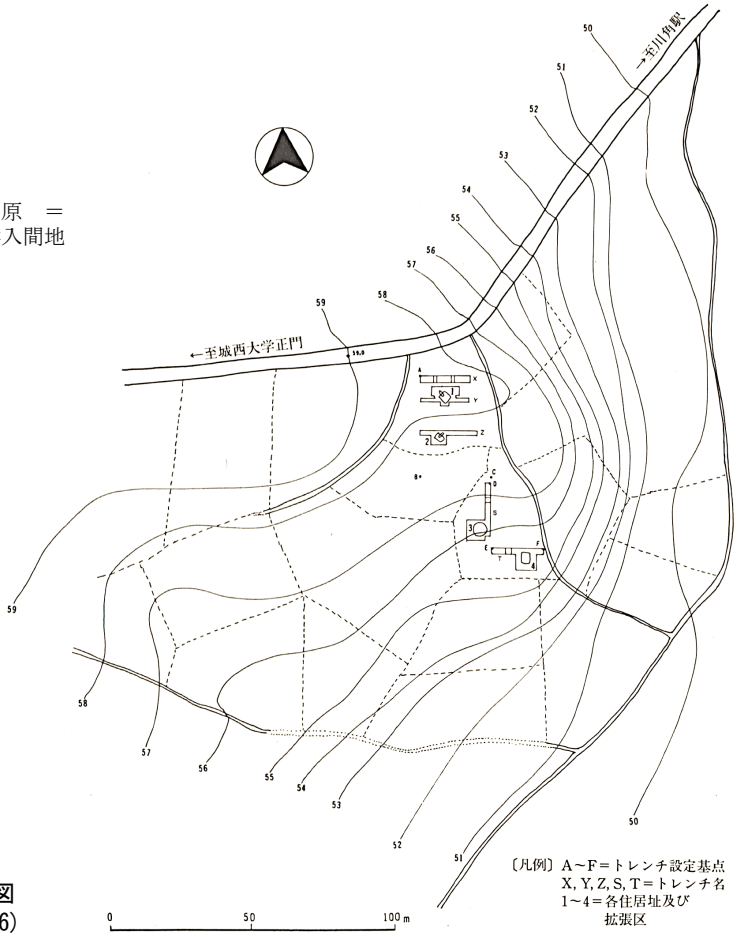
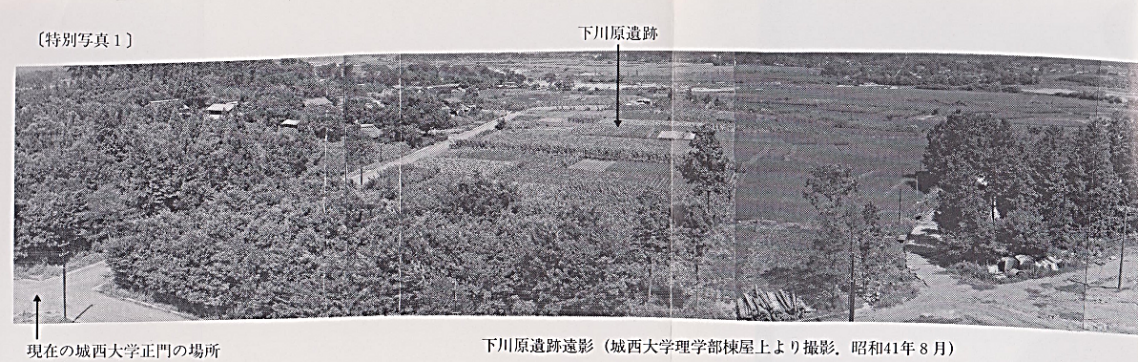
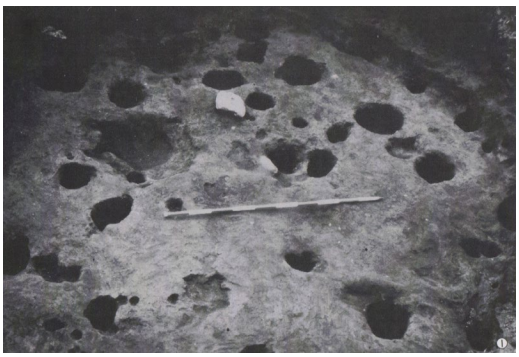


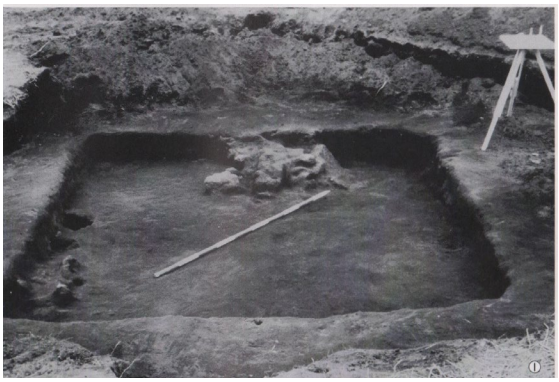
図9-1　下川原遺跡地形実測図
(城西大学学術調査室編1991:6)



1



2



3

4

6

5

図9-2　下川原遺跡の遺構

1. 1966年撮影遺跡遠景(城西大学学術調査室編1991:特別写真1)
2. 第3住居址(城西大学学術調査室編1991:PL.2)
3. 第1住居址(城西大学学術調査室編1991:PL.1)
4. 発掘調査風景（清水公一氏所蔵写真）
5. 住居址出土完形土器（清水公一氏所蔵写真）
6. トレンチ発掘調査風景（清水公一氏所蔵写真）

図9-3　下川原遺跡の発掘調査風景（清水公一氏所蔵写真）

図9-4　下川原遺跡の出土遺物

中小坂

埼玉県入間郡坂戸市南部の、入間川、小畔川の合流地点の西側にあるなだらかな台地上に位置する。すぐ南は川越市と境界を接する。もともとこの近辺から縄文土器を主体とする遺物が採集されることは知られており、重要な遺跡だと認識されていた様だ。現在は上谷遺跡(旧石器時代、縄文時代)の範囲内の一区画と理解されている。近隣には原遺跡(奈良時代、平安時代)、西窪遺跡(縄文時代)、新町遺跡(弥生時代、平安時代)、大穴城跡(江戸時代)が所在する。

発掘調査は、城西大学の「入間地区学術調査五か年計画」の一環として、その最終年度に当たる1969年の7月15日から8月3日まで、城西大学考古学研究会を中心に、坂戸町(当時)教育委員会、文化財委員、遺跡地の地主であった栗原基之氏の協力を得て実施された。また報告書作成には、佐藤達夫氏・東京大学助教授(当時)、岩生周一氏・東京大学理学部地質学教室教授(当時)が参加している。調査報告書は五か年計画によって調査された遺跡の中で最初に刊行された。表紙題字は刊行当時の理事長・水田三喜男氏によるものである。

調査に先立ち、土地所有者の栗原基之氏の採集資料から、縄文時代中期か古墳時代の遺構があると推察された。「入間地区学術調査五か年計画」では入間郡西部の縄文時代中期の調査を継続しており、本遺跡調査もその延長線上にあった。また調査地点は森林内にあるものの、既に近隣の開発が進行しており、造成前に調査しておく必要性もあると判断されている。

発掘調査では、縄文時代、古墳時代の遺構、遺物が検出された。縄文時代中期の竪穴住居跡２基(加曾利ＥⅠ式・加曾利Ⅱ式土器が出土した第１号住居跡、勝坂式土器が出土した第２号住居跡)、埋甕遺構(底部を切除した勝坂式土器が出土)、焼土遺構と、古墳時代の住居跡（弥生土器・土師器の壺・器台・器台付甕が出土した下部遺構(五領式期)と、土師器・須恵器の杯・壺が出土した上部遺構(鬼高式期)）が検出された。また発掘前からかなり長距離に渡って溝が存在することが確認されており、発掘によって縄文時代中期の土器(勝坂式土器、阿玉台式土器)が出土し、竪穴住居に伴う排水路であると結論された。

なお特筆すべき遺物として、縄文時代中期に属する第１号住居跡からは土製耳飾りが、古墳時代に属する住居跡下部遺構からは土製勾玉が出土している。

参考文献

城西大学学術調査室編　1972年『中小坂　＝城西大学入間地区学術調査報告＝第五輯』

※題字は水田三喜男筆(報告書より引用)

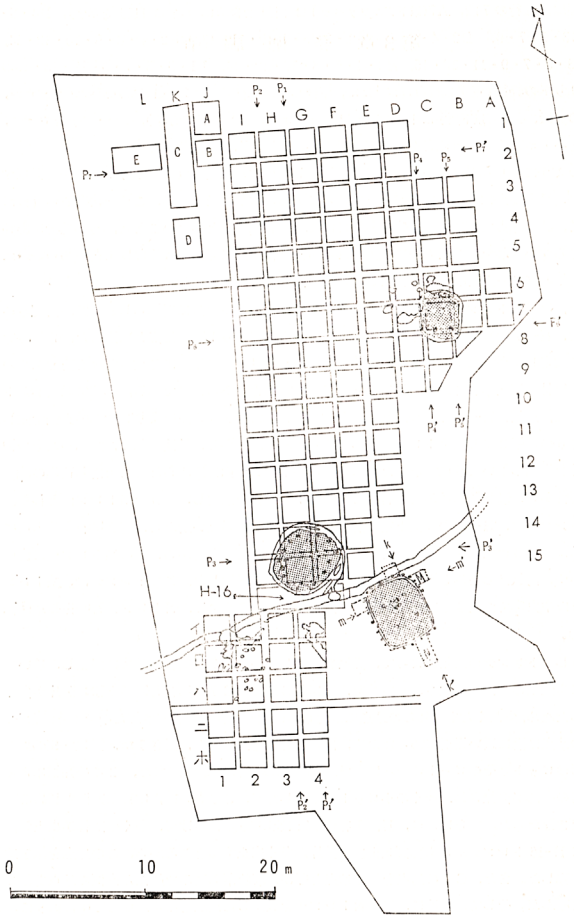
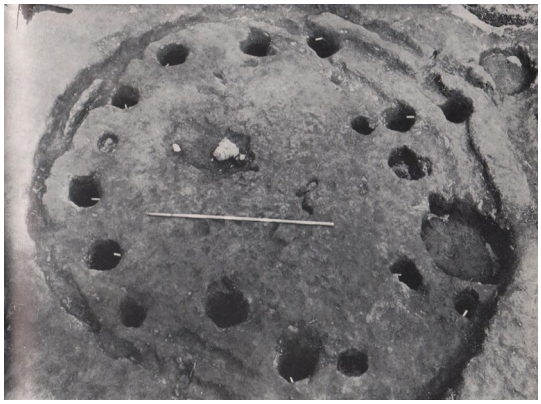
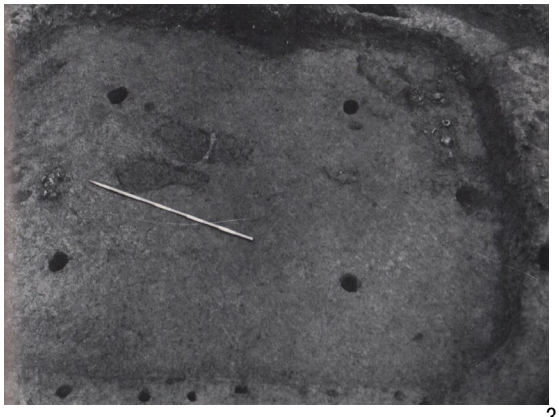


図10-1　中小坂遺跡　発掘地点
(城西大学学術調査室編1972:9)

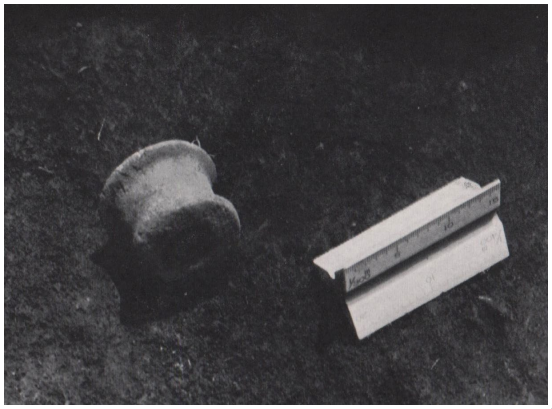


1

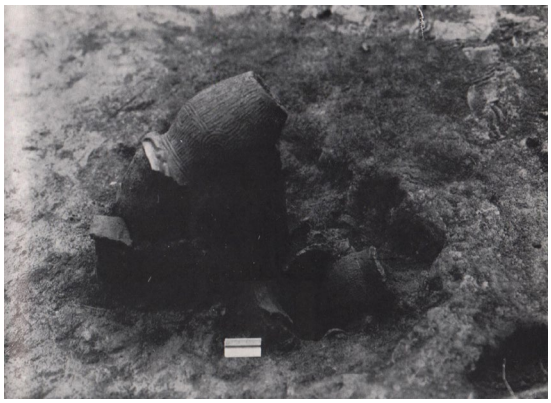
2



3



4



5

6

7

図10-2　中小坂遺跡

1. 第1号住居址(城西大学学術調査室編1972:PL.1)
2. 第2号住居址(城西大学学術調査室編1972:PL.2)
3. 第4号住居址(城西大学学術調査室編1972:PL.2)
4. 耳栓出土状況(城西大学学術調査室編1972:PL.3-a)
5. 第2号住居址床面出土土器(城西大学学術調査室編1972:PL.3-a)
6. A遺構坏出土状況(城西大学学術調査室編1972:PL.4)
7. B遺構土師器出土状況(城西大学学術調査室編1972:PL.4)

図10-3　中小坂遺跡の発掘調査風景

図10-4　中小坂遺跡の出土遺物

新しき村遺跡

新しき村遺跡は、埼玉県入間郡毛呂山町葛貫に位置する。遺跡名は、1939年に武者小路実篤氏の提唱した生活精神の下に建設された毛呂山町の「新しき村」(宮崎県木城村に続く「東の村」)の敷地内に位置することに由来する。八高線の東側、秩父丘陵から東に延びる舌状台地上の遺跡である。

昭和42年(1967年)3月、貞末堯司氏、桑原護氏の両名が、田中一郎氏の案内により越生町、毛呂山町の遺跡を巡視する中、「新しき村」の加藤氏によって収集された縄文時代前期末から古墳時代末に至る考古資料の中に、弥生時代中期末ないし後期初頭のまとまった土器群が存在することを知り、将来の発掘地として注目したという。

発掘調査は、城西大学の「入間地区学術調査五か年計画」の一環として、第3年次(1967年)の7月15日～8月2日に行われた。発掘担当は貞末堯司氏に加え、田中一郎氏、桑原護氏が参加している。概報は出されたものの正式な報告書は刊行されておらず、調査時の図面や写真資料は散逸し、断片的な情報しか残されていない。以下は概報の内容に依って記載するが、他の文献によって情報に齟齬もあるため適宜併記する。

概報によれば3地点で調査が行われ、当時「新しき村」が購入し開墾を始めていた舌状台地をＡ地点として一般調査が行われた。概報では発掘調査は行われておらず、茅山式土器(縄文時代早期)が若干得られたのみとされるが、『城西考古の歩み』によれば発掘初日に2m×5mのトレンチ6本が掘り上げられたと記載され、略図も記されている(城西大学考古学研究会1967:9-10)。

また村の入口にある桃畑の隣をＢ地点として約200㎡の発掘が行われた。弥生土器が収集された地点であり、実際に縄文時代早期から弥生時代に至る土器、打製石斧、石鏃が出土した他、茅山式期と推察される炉跡状の遺構3基が検出された。『新編埼玉県史』によれば、B地点にて柱穴を伴う住居跡らしい遺構を検出したとされる(埼玉県1980:205)。

そして「新しき村」内の増田壮（集会場）前の空地をＣ地点として約350㎡の発掘が行われ、押方文土器(縄文時代早期)を伴う円形の住居址を1基、炉跡2基、ピット状遺構が検出された。住居址は調査坑の壁面で確認されている(城西大学考古学研究室1967:20)。炉跡は住居址南寄りに1基、北側3m当たりに1基検出され、後者はB地点と同様であり、上部から押方文土器が出土している。住居址付近から打製石斧、フレイク(剥片石器)、石鏃が出土している。『新編埼玉県史』によれば、C地点では炉跡と考えられる遺構1基と、墓壙状遺構が1基確認されたという(埼玉県1980:205)。

発掘調査中は新しき村から度々差し入れがあり、学生達を喜ばせたという(城西大学考古学研究会1967:11)。またこの調査をきっかけとして考古学研究会と新しき村との交流が始まり、夏季の野球試合が恒例として継続していた(城西大学考古学研究会1972:51-58)。

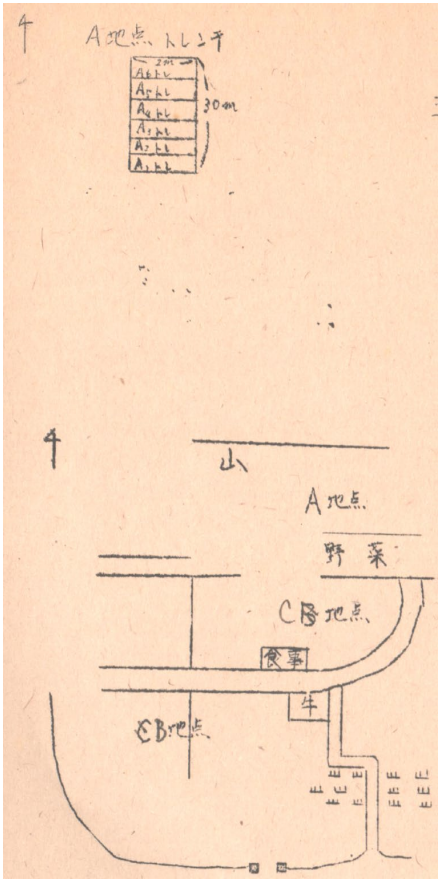


図11-1　新しき村遺跡発掘地点
(城西大学考古学研究会1967:9)

参考文献

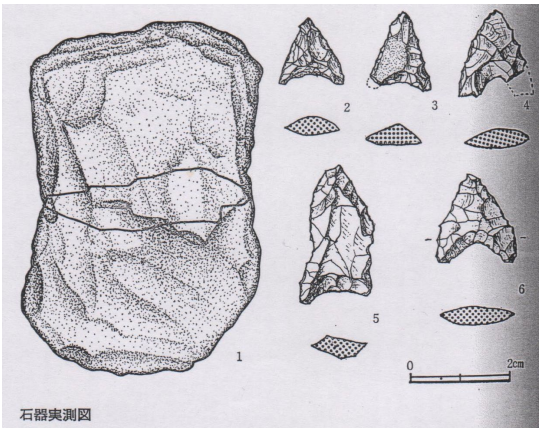
貞末堯司・桑原護　1968年「12　入間郡毛呂山町新しき村遺跡」『第1回遺跡発掘調査報告会　発表要旨』：13

埼玉県　1980年『新編埼玉県史　資料編1　原始・旧石器・縄文』

城西大学考古学研究会　1967年『城西考古の歩み　第2部 草創期 1968』

城西大学考古学研究会　1972年『城西考古の歩み　第4部 草創期 1972』

1



2

図11-2　新しき村遺跡の屋外炉跡と石器
（地点不明　埼玉県1980:205）

図11-3　新しき村遺跡の出土遺物

上台山遺跡

上台山遺跡は、埼玉県入間郡に位置する。越生駅西側にある、法恩寺山と通称されていた上台山の頂上付近を中心に広がる縄文時代の集落遺跡である。江戸時代末に完成した『新編武蔵風土記稿』(1828年)にも記載され、古くから知られていた遺跡である。

発掘調査は、城西大学の「入間地区学術調査五か年計画」の一環として、第4年次(1968年)の夏と冬に行われた。その後も続く同遺跡の調査の嚆矢となった記念すべき発掘であったが、概報が刊行されたのみで、断片的な情報しか残されていない。

7月20日～8月10日に行われた発掘では1000㎡を発掘し、勝坂式と加曽利E式土器を伴う縄文時代中期の住居跡6基を検出している。3、4号住居跡からは縄文土器を埋設した埋甕が検出されている。いずれも底部を欠き中腹部で切断され埋められていたという。また緑泥片岩を用いた石刀と思われる石器が出土している（貞末1969:9-10）。

11月20日～12月22日に行われた発掘は、夏に未調査だった地点が宅地造成によって削平されることになったため緊急発掘として実施され、調査後に分譲宅地となったという。調査区域は約20000㎡に及び、縄文時代中期の住居跡7基を検出した。3号住居跡では石組の炉跡と伏せられた加曽利E式土器が検出されている。6号住居跡では完形と埋甕の加曽利E式土器が出土している。なお台地平坦部の中央では遺構が発見されておらず、概報では表土のすぐ下に緑泥片岩の大きな岩盤があるためではないかと推察している（貞末1970:2-4）。

なお特筆すべき資料として、糸巻形で刺突紋様を伴う耳栓が出土している(城西大学学術調査室編1972:93)。

その後は「上台遺跡」の名称で、82年4月に越生町教育委員会が調査を行っている。上台山一帯に及ぶ縄文時代の村跡が認められ、縄文時代早期に開始し、中期に最盛期を迎えたことが確認されている。現在は上台区集会所が建っている（越生町教育委員会1984、石川1986,1997、越生町HP）。

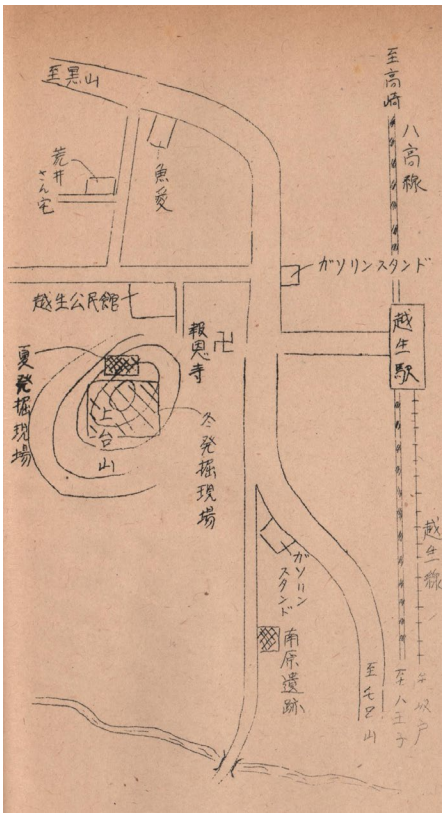


図12-1　上台山遺跡発掘地点
(城西大学考古学研究会1968:48)

参考文献

石川久明　1986年『広報おごせ』9月号、越生町役場

石川久明　1997年「第一章　遺跡は語る」『越生の歴史Ⅰ』越生町教育委員会

越生町教育委員会　1984年『じょうだい　―上台遺跡発掘調査概報―』

越生町HP
http://www.town.ogose.saitama.jp/kamei/shogaigakushu/shogaigakushu/gyomuannai/kyoikuiinkai/shogaigakushu/bunkazai/100point/100pt/014.html（最終閲覧日2021年2月21日）

貞末堯司　1969年「4. 埼玉県入間郡越生町上野上台山遺跡発掘概報」『第2回遺跡発掘調査報告会　発表要旨』：9-10

貞末堯司　1970年「2. 埼玉県入間郡越生町上野上台山遺跡発掘概報」『第3回遺跡発掘調査報告会　発表要旨』：2-4

城西大学学術調査室編　1972年『中小坂　＝城西大学入間地区学術調査報告＝第五輯』

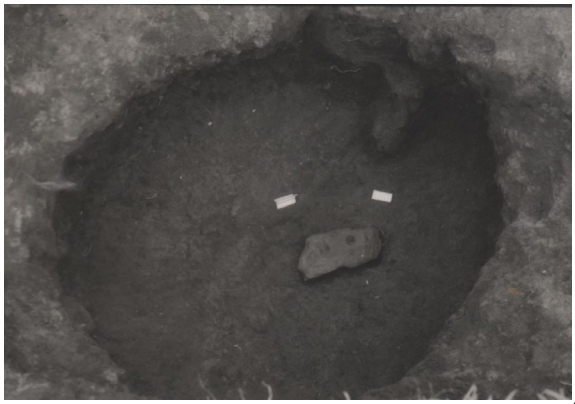
城西大学考古学研究会　1968年『城西考古の歩み　第3部 草創期 1968』

1

2

3

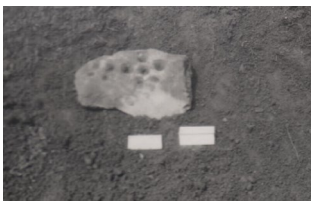
4



5

6

7



8

9

図12-2　上台山遺跡(1968年夏調査)

1

2

3

4

7

5

8

6

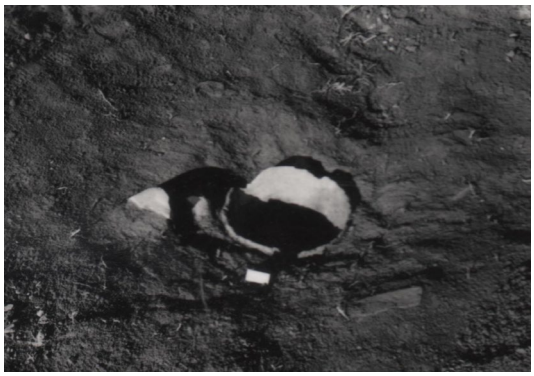
9

図12-3　上台山遺跡　埋甕遺構(1968年夏調査)
5.第4号土坑

図12-4　上台山遺跡(1968年夏)の発掘調査風景

図12-5　上台山遺跡(1968年夏)の出土遺物

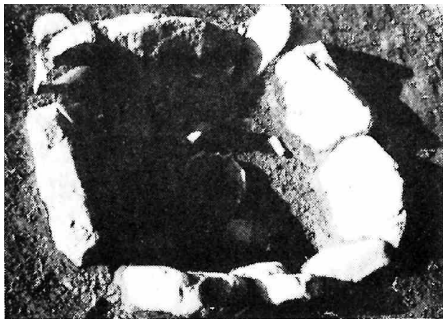
1



2

3

4



5

図12-6　上台山遺跡(1968年冬調査)
1. 遺跡遠景　　2. 埋甕遺構
3. 石組炉址　　4. 住居址？
5. 3号住居址中発見の石組炉址(貞末1970:3)

図12-7　上台山遺跡(1968年冬)の発掘調査風景
※後半8枚は清水公一氏所蔵写真

図12-8　上台山遺跡(1968年冬)の出土遺物

現在の『城西考古』

2021年現在の城西大学には、考古学を専門とする教員が複数在籍している。形は変われども、考古学をテーマとした教育研究活動が続けられている。

現代政策学部・奈良澤由美

考古学、美術史学を専門としている。フランス、イタリア、チュニジアなど地中海世界の宗教文化財を中心に、幅広い調査研究活動を続けている。2017年、フランス南部の教会祭壇の類型を体系化した研究が評価され、研究題目「Les autels chrétiens du Sud de la Gaule (Ve -XIIe siècles)（南ガリアのキリスト教祭壇：５世紀から１２世紀まで）」として日本学士院賞を受賞した。

マルセイユ（フランス国ブーシュ＝デュ＝ローヌ県）のサン＝ヴィクトール修道院にて、2018年9月７日～11月12日に開催された展覧会L'autel de Saint-Victor et le décor sculpté des autels en Provence médiévale, Ve-XIIe siècle（邦訳「サン＝ヴィクトールの祭壇とプロヴァンス地方の中世の祭壇彫刻装飾：5～12世紀」）のポスターセッションのうちの2枚が今回展示されている。この展覧会は、奈良澤由美氏（城西大学）、ミッシェル・フィクソ氏（地中海人文科学センター中世近世地中海考古学研究所）、マニュエル・モリネール氏（マルセイユ市歴史博物館学芸員）の企画により、サン＝ヴィクトール友の会主催、マルセイユ市歴史博物館の協力で開催された。

（左）サン＝ヴィクトール修道院に伝わる祭壇卓（上2つの写真）は、クリスモン（キリストΧριστος の初めの２文字を重ねた組文字）、鳩、葡萄蔓など、この時代のキリスト教美術の典型的な装飾モティーフが浮き彫りされている。

祭壇は聖体拝領の典礼の場として教会堂において最も重要かつ不可欠な設備であるが、考古的実体としての研究は不十分であり、解明されていないことが多い。南仏は初期中世の祭壇が例外的に多数残されている地域であり、サン＝ヴィクトールの祭壇卓は、そのうちでもとくに大型であり保存状態が良い。

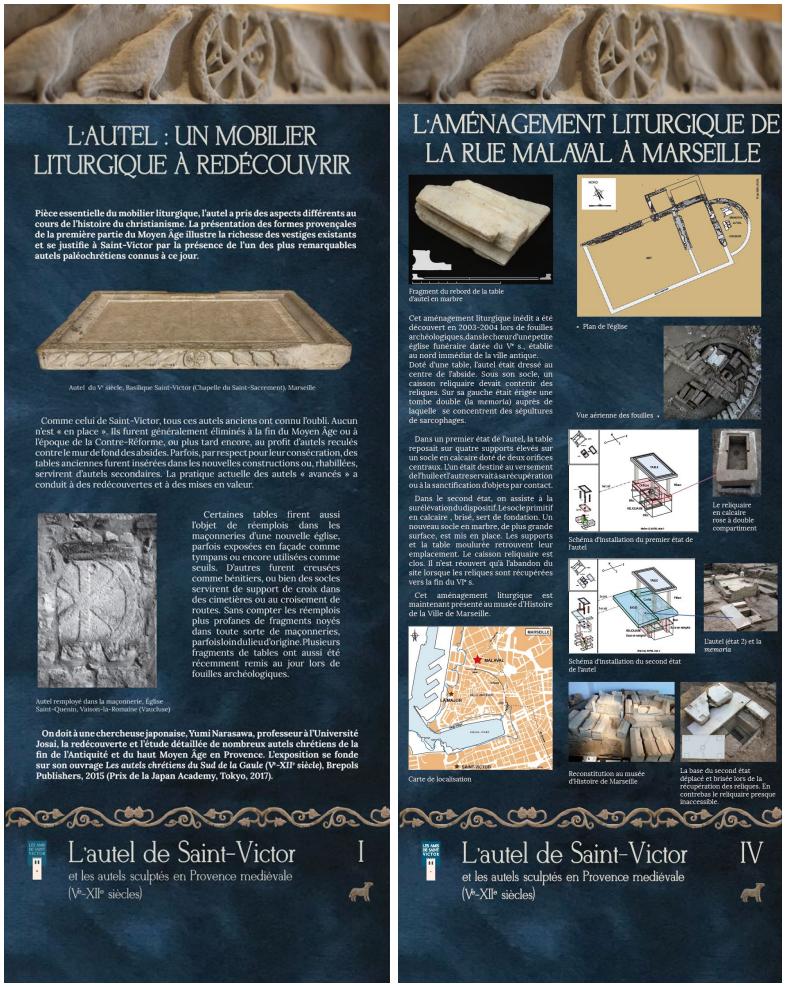


図13-1　サン＝ヴィクトールの祭壇とプロヴァンス地方の中世の祭壇彫刻装飾：5～12世紀

（右）2003～2004年にマルセイユのジョリエット地区マラヴァル通りの敷地にてモリネール氏の指揮により行われた発掘調査で発見されたキリスト教埋葬用バシリカの祭壇システムが紹介されている。調査において奈良澤氏が祭壇研究を担当した。

この遺構は5世紀初頭に建設され７世紀の初頭には放棄されたと推定されるが、祭壇システムについて、これまでにない画期的な考古資料を提供する。聖堂のアプシス中央に祭壇の下部構造が残されているが、祭壇台座の中央部分の二つの穴を通して、布や液体を使い、間接的に下の聖遺物と接触をしたと想定される。現在、マルセイユ市歴史博物館内に遺構は再現されている。

1

2

3

4

現代政策学部・土屋正臣

文化資源学、文化政策を専門としている。藤岡市役所の職員として積み上げた実務経験を活かし、文化財の保護や、市民参加型の文化財行政、文化財を活かしたまちづくり（近年は、1970・80年代の埼玉の文化行政）を調査研究している。地域における博物館、美術館のあり方も重視しており、城西大学水田美術館では「震災」展(2022年1～3月)を開催する予定。

図13-2　研究テーマ、著書

1. 宮城県石巻市　慶長遣欧使節団出航の地
　伊達政宗の命を受けた支倉常長一行が、ローマ法王に謁見するためイタリアのチビタベッキアに寄港した歴史的事象に基づき、1977年にチビタベッキア市と宮城県石巻市が姉妹都市提携を締結した。国の外交政策だけでなく、地方自治体が独自に文化外交を展開している。
2. 埼玉県本庄市 本庄市民文化会館ロビー
　1980年代、戦後の物質的な豊かさを追求する国土開発から、精神的な豊かさやゆとりを求めた文化行政が各地の地方自治体で実践される。そのトップランナーの一つであった埼玉県にて、地域の歴史性に基づいた新たな文化創造拠点の整備を目指して建設された本庄市民文化会館のロビーには、埼玉県の代表的な地域イメージとして当時盛んに取り上げられていた「古墳文化」を象徴する壁画が採用された。
3. 長野県茅野市 茅野駅前の縄文のビーナス
　長野県茅野市では、2000年代以降、原始・古代に焦点を絞り縄文文化をモチーフにしたまちづくりを展開している。
4. 土屋正臣　2017年『市民参加型調査が文化を変える』美学出版

経営学部・石井龍太

琉球諸島の考古学、特に「近世琉球」期を専門としている。特に2010年以降、集落遺跡の調査を重視し、年数回の沖縄県内での発掘調査を行うと共に、調査研究内容を論文、書籍として公表している。また博物館や美術館での展示を通じた成果発表を積極的に実施しており、城西大学水田美術館で『地域表象の仮面文化　～ローカルヒーローの造形美』展（2020年12月）、『むんだすいぬやーぬ　首里城の屋根』展(2021年7～9月)を企画した。

図13-3　石垣島安良村跡出土資料(18～20世紀)

謝辞

本展示会開催に当たり、多くの方々のご助力を得ました。謝して記します。
（敬称略　あいうえお順）

越生町教育委員会
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
坂戸市教育委員会
毛呂山町歴史民俗資料館

足立拓朗
石川久明
植田雄己
大平秀一
久保田慎二
貞末麻哉子
澤田洋
清水公一
清水隆夫
高桑稔
瀧瀬芳之
中村誠一
堀合澄子

『城西考古』

2021年9月20日　発行

著者　石井龍太

編集　城西大学経営学部石井龍太研究室

〒350-0295　埼玉県坂戸市けやき台1-1

TEL.049-286-2233（代表）

石
龍
太
城西大学
経営学部
マネジメント総合学科
准教授

JOSAI UNIVERSITY
城西大学水田美術館
MIZUTA MUSEUM OF ART, JOSAI UNIVERSITY